

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

第4回「思考様式および実践としての現代科学とローカルな諸社会との節合の在り方」研究会（2013年2月24日）発表要旨

演題「身体とテクノロジーを介した社会性の創出：医療の経験を問い直す」

山崎吾郎（大阪大学）

本発表では、身体の一部である人間の臓器が、移植の実践において多様な全体性を獲得することに着目し、その特殊な感覚や経験が固有の社会性を生み出す契機となっていることを議論した。

発表では、はじめに、身体を理解するうえで二つの異なるリアリティの構造が歴史的にありうることを指摘し、Chunglin Kwa (2002)の議論を参照しながら、ロマン主義的思考様式、バロック的思考様式の特徴についてそれぞれ検討した。そのうえで、第二に、臓器移植医療を例としながら、匿名化された身体部品（臓器）が全体性を獲得する場面を提示し、移植にともなうさまざまな感覚・情動が、贈与の成立、社会性の創出、経験の共有に同時に関わっていることを指摘した。

多様な身体の現れを理解するには、臓器を特定のドナーの身体の一部として「全体一部分」関係に限定してとらえるのではなく、臓器そのものに内在する身体性に注目することが重要である。こうした理解を進めることは、バロック的身体論＝社会論のひとつの可能性である。一方で、従来の生命倫理学が想定する、自己とそれに従属する身体という理解は、むしろ特定の「全体一部分」関係を自明のものとする（しばしばロマン主義的な）人間観に由来している。医療制度は通常、この自明視された「人間像」にもとづいて設計されるため、多様な身体性とその可能性を理解することは、制度的な問題を扱ううえでも重要な視座をもたらす。その意味で、バロック的身体論を構想することには、一定の批判的意義が認められる。

最後に、発表者の今後の研究の課題と方針について述べ、脳死や長期脳死の問題においてみられた問題意識を引き継ぐ形で、終末期医療における身体的（非言語的）コミュニケーションに関する今後の研究テーマの概要を示した。脳の視覚化といった、技術を介したコミュニケーションの在り方を検討すること、微細な身体的反応がもつ記号作用に着目して、情動や感覚が引き起こされるプロセスを明らかにすること、そのことで、正当化しにくい感性・感覚の「論理」を理解するといった点を重要な課題として提示した。

演題「文化を進化的に考えるとどのようなことか」

中尾央（日本学術振興会特別研究員，名古屋大学情報科学研究科）

要旨：本発表では，大きく分けて以下二点について考察する．まずは，(1) 文化の歴史的変遷を考察する際に，進化生物学の道具立てがいかに有効であるかをパターン（これには，たとえば地理的な分布パターンや，先祖－子孫関係という歴史的パターンなどが含まれる）研究とプロセス研究（これは，ある歴史的変化がなぜ，どのようにして生じたのか，その原因を考察する研究であり，進化生物学では自然選択や遺伝的浮動などがその原因と考えられることが多い）の両側面から示す．より具体的には，(a) 先祖－子孫関係という歴史的パターンを推定する系統学（*phylogenetics*）の手法を文化に適用した文化系統学の研究（中尾・三中らによる），その中でもアメリカ南東部で出土した矢じりの系統関係を推定した研究（O'Brien らの研究），さらには (b) 最適化モデルを矢じりの歴史的変化に適用した研究（Bright et al による），または (c) どのような規範や宗教が次世代へより受け継がれやすいのかを考察した研究（Boyer, Ramble, Nichols らによる）を取り上げ，文化の歴史的変遷を考察するにあたって，系統学や最適化モデルなど，進化生物学で発展させられてきた道具立てが有効であることを論じる．次に，(2) こうした文化の進化的研究がさまざまな社会科学研究を総合するというアイデアに関して，たとえば文化人類学が (1) のような研究とどのような関係にあるのかを考察する．Mesoudi の提起する議論では，文化的多様性を明らかにするものとして文化人類学が位置づけられていたが，それだけではなく，それぞれの地域において文化に付与された意味なども文化の適応度に影響を及ぼし得る要因の一つとして考察すべきであり，その意味では文化人類学の成果も文化の進化的考察にとって重要であると論じる．